

『哲学詩集』第四回

トンマーズ・カンパネッラ著

澤井繁男訳

28 真正なる哲学に則った愛の詩

カンツォーネ

マドリガーレ 1

わが愛するひとたちよ、ぼくが謳うのを聴いていただきたい。いつでもどこでも愛は存在していた。神はその愛の手を借りて世界を創造した。力や必然から創られたのではない愛の持つ能力は多くの仕事の手筈を整えはするものの、愛が真実願っているのは神の叡智で、万有の源である。

愛は言った——「わたしは神の顕現です」と。

愛は万有にとって善であり、思慮の点でも真正で、能力にも欠くことの出来ないものである。

愛はもの心つくまえから存在している。思慮や能力から離れないからか、いつのまにか、ぼくは愛の虜とりこになってしま

った。双方ともに愛は目を配っている。

力や知は愛なしでは存在し得ない。それゆえは、能力と思慮と愛を崇めて、神とみなしている。

〈解題〉

愛があらゆるものの源泉である。「愛・知・力」という、カンパネッラにとつての三つの大切な原理（プリマリタ）は、善なる愛をそのいちばんの中心に据えている。愛が神に世界創造をさせたときまで述べているあたり、タイトルの「真正なる哲学に則った愛の詞」の冒頭を飾るにふさわしい詩句であらう。

「愛」は「力」と「知」から絶えず生まれてくる。「力」と「知」は欲しなければその効力を発揮出来ない。つまり両者とも「愛」しだい、という意味である。「愛」を三者のなかで中枢に置く考え方は、レオーネ・エブレオ（一四六五頃—一五三五年、スペインからナポリに亡命してきたユダヤ人詩人）作『愛の対話』全三卷（本田誠二訳、平凡社、一九九三年）なかの最終卷「愛の起源」に酷似している。エブレオは、宇宙生成と愛の起源に触れている。それによると、〈世界〉は時間的で、その時間のなかで神が〈渾沌〉^{カオス}を経ず、〈愛〉によつて一挙に世界を創造したとある。ヘブライの世界創造観である。カンパネッラの「愛」に、ヘブライ的思念が含まれていないと言え、彼の交流関係からして、その説はすぐに覆るであらう。

マドリガーレ 2

完全無比な生き物の棲む黄金の時代のまへは渾沌としていて、さながら巨大な卵の態^{カク}をなしていた。卵のなかには靈魂を想わせる三位一体^{モントリアーア}の神が孵化しつつあり、大いなる新たな形を顕わしている。

神は渾沌のなかで、必然・運命・調和に影響を与え、力・愛・知の三つを、もともと万有に存在している種を利用して時間をかけながら創り上げていった。

それゆえそれぞれの実体は実在するがために、知ること、愛することが可能なのである。

知を失くしたり愛を喪失したりすることはない。死に及んでも蘇ってくるからである。

いのちは命を生き、宙を漂い巡る。

なぜなら生きたいという希望はいつも前向きだから。

それにしても、必然・運命・調和の三つは被造物に備わっている知の効能を削ぎ落とし、憎悪を抱えて生命の連鎖を解いてしまう。

〈解題〉

「はじめに言葉ありき」ではなく、「渾沌^{カオス}ありき」が、カンパネッラの世界創造のようである。卵の比喩は錬金術への精通を想わせる。必然・運命・調和の三つは、西欧（特にルネサンス期）の精神史を考える上で重要な概念である。この三つが、カンパネッラの三つのプリマリタの根幹にある。

マドリガーレ 3

第一存在である神、不滅でいつも清謐^{せいひつ}で、限りなく善であり、愛の下でふさわしい対象である。また森羅万象はかの第一存在に由来し、愛の本質的な対象は良質で歛^{かたむ}ばしい、

このように一定の像^{かたち}を有する愛が自己愛によって神を愛するのである。

けれども無限の情熱と永遠を形成することによって、神がそのような基となるわけである。

第一存在の周辺の存在を予言しないひとのなかに、死にたいして内的憎悪が生まれ、

さらに自分自身を憎むが、

そうした人物は最善のひとつである。

善については愛の感覚が全身にしみわたっていく。

しかし悪が原因で死ぬ感覚の一部、

部分的な愛には憎が生み出されたのである。

〈解題〉

カンパネツラ特有の、たぶんに理屈っぽい、悪く言えばこじつけにも思える理論である。

第一存在とは最高善のことで、愛の対象にふさわしい。第二存在は愛そのものに似ている。この二点から第二存在が第一存在に由来していることがわかる。つまり、第二存在は神のように、いつも無限にあらゆる存在を愛するからである。こうしてみずからを愛することですう神を愛する。続いて存在にたいする愛から憎しみが生まれ、存在しないモノに憎悪を覚えるようになる。〈知恵の書〉第十一章二十五に「神は御みずから創り給ったもののいずれも憎まず」とある。したがって「存在しないモノに憎悪を覚える」のである。

マドリガーレ 4

神は何びとも憎まない、ひとびとの苦しみや死も恐れない。しかしひとびとが授かったみずからの人生を凝視す

ると、すべては善い方へと向かう。だが、靈魂を神と同一視する落度があるときには、罰を犯すことになる。嘘言を吐かず、いつもゆとりを以てひとびとに接せよ。それでも運命は雜言ざうごんと死を以てして、調和のとれた大帝国を築き上げてしまう。

世界の各地域を苦々しく思うひとなどいない。それに反して飲んで戦争をしたり死んでいったりするひとは、謎めいたべつの人生のなかで正義を行なっているのである。

それと同じようにパンはからだのなかで死して血となり肉となり、循環しているわけである。

〈解題〉

善が欠けている場合、自己の内面を見つめないときの神の瞋恚しんいを最終的に述べている。パン（食べ物）を食して、それが血肉化していくのを比喻として用いており、さらにそのまえには「大帝国」という政治的比喻も使用しており、カンパネッラの脳裡には、肉体と政治と神との微妙な構図が描かれているように思われる。

マドリガーレ 5

神や世界にぼくは悪を看取していないし、恐れも妬みねたもない。そうしたものが生まれるとすれば、怠惰から生じ、多くのひとは歎びであり確固たるものである事柄の欠陥からも怠惰は導かれる。

普通の物質には、神がかつて王国創建の場として好んだ円形の広がりがある。それが部屋であれ、何らかの対象であれ、そうした世界を不滅にするために、熱と冷とが大切にされている。

必然が必然を作り出すような情愛を罰した時点から、戦争が運命を罰し、天地の調和を区分けしてしまった。

ここに愛がみずからを愛となすために愛の戦いが生じたのである。

王は奴隷セルヴでなく王みずからの手で罰し、ほくは火を有する者を、友人である火のために火を用いて燃やした。

大地は大地の場にいることを欲した。

火と土の対立が生じないところからは

もし対抗するとなれば、冷と熱とは友でもあり敵でもある。

〈解題〉

はじめてカンパネッラの思想の一角を担う「冷」と「熱」の二つのせめぎ合いの構図が詠まれている。「冷」と「熱」とはともに活動的だが非物質的である。二つが存在しないところでは対立は起きないのは道理で、「熱」は「冷」ではないし、「冷」は「熱」ではない。いずれかの存在如何で、友好と統一が定まる。

マドリガーレ 6

美德と深慮から生まれる愛は

力と知を結びつける節目であり、

至上なる善は、つねに在るわけではないが、

自己の利益でなく意欲や愉悦であり、確固たる善でもあるので、欲でないことはない。

愛というものは、浮世の気まぐれに弄うされる。愛の快樂と安逸はいつまでも欲であり、未来永劫、解けることはない、

それゆえ愛は神の容貌を失ってしまったのである。

というか、愛は、こうした悲運を背負ってしまったがために、愛の愛たる善を自画自賛しすぎて欲が深くなり、死をまぬがれないのである。

それゆえ愛は生あるものの不死をよしとしている。

己のなかで生命を失ったと感じる者は、他所に生命を求め、突然の死をさける術すべを探そうとする。

〈解題〉

カンパネッラは「愛」を三通りにわけているようである。

① 神的愛

② 世界（この世）に注がれた愛

③ 生物に関わる愛、である。

①の愛は精霊と関係している。精霊は本質的に個的なものゆえ、わがままで節度なく、斑気むらさきである。②の愛は、永遠性を希求している。それも、自分自身でなく神によるものである。我欲のない歓喜に満ちた愛を指す。③の愛は、不死なる生を重んじている。

マドリガーレ 7

窮乏するとひとは、それがために、賢くなって、大胆な愛、激情や名声、それに人生という布地の織り方を知ろうとすることへ、強烈な欲望や渴望、そして熱情を再び生み出すものだ。

もとより太陽は大地を食し、大地は空を見据え、空は星辰を食べたがるだろう。

ここに戦乱勃発し、運命が戦いの火種を撒く。精神や気質や靈魂、それに岩石や草木が共食いし合う。すると、愛が歎ぶ一方で、傷ついたものはとてもゆつくりと蘇生し始める。

感覚する悦楽は保つにふさわしい行為であり、混乱を感じるとすれば、それは痛みである。自己保存こそ、究極の善であり、破壊は最悪である。

それゆえばくたちは、悪もしくは善について語るのである。

保存でも破壊でも、それなりの筋道や因果があつて、誇示や挑発はつきものである。

〈解題〉

窮乏、つまり欠落があることによつて生まれるさまざまな現象を謳っている。窮乏が、一見愛を生み出すのではなく、靈肉の歎びによつて愛が形成されていくのである。後半に出てくる「自己保存」という言葉はカンパネラの思想の中核に位置する考えであり、「究極の善」という表現にそれは端的に表われている。

マドリガーレ 8

敵から逃れるか、敵を打ち負かすか。

食事を充分に摂つて体力を回復しても、生き抜いていくにはまだ足りないものがある。

太陽は夥しい作物で大地を満たし、神の御技みわざを記憶に刻みこませる。死すべき存在としてある人間は、男と女に分かれるが、それは太陽と大地とに言い換えられよう。お互い、ときに利用し合っている。大地と太陽がひとつになると、

愛は詮索の目を光らせて、いのちの力をそぎ落とす。

向上心のある者は、自分の死のあとに子孫を遺す。この行為は愛するよりも愛されるほうに重きがある。

ここに、愛は愉悅に転じて、思慮分別がつかなくなる。

窮乏ゆえに身についた技で子孫がつくれるように、大なり小なり窮乏に左右されるのである。

それゆえ、美徳が賢慮の傍らにいるがごとく、悪徳も存在するわけである。

〈解題〉

偶然の賜物か、自然の叡智は、男と女をつくった。女は、自然が完璧になるため、男を補完する意図で生み出された。食物やそれを稔らす大地、そして男と女は、これみな神の御技でなくて何であろう。カンパネッラは子孫を遺さなかったが、生殖の重要性を認識しており、また食によつて生きていくという生命のありようまで視線を配っている。

マドリガール 9

けれども愛はどこでも、善の蓄えを隠し持ち去ろうと考えるまえに、ぼくたちが美を招き寄せる合図に渾身で気づくのである。目論んだそのとき、人間は罪を犯すのだ。人間の生きている世界、あるいは多少とも生きる理念を案出するこの世に稔りはわずかだ。

しかし大きな目標と歓びにふさわしい場では、重大な過ちをさんざんしながらも、愛の歓喜が目当てであり、至高の目的であるとわかっている。

愛がいつも、生きる試金石や契機や媒介にでもなるわけではない。ああ、気のふれたひとよ、彼は絶えず卑劣と怠惰

を生み続けている。

暗愚な法律で肉欲は抑制されはしないが、大いなる叡智が愛という小舟を仕立てて、無死へと進んでいく。人間に死は免れないが、書くという不滅を筆に託して高みへと上昇し、何かを希求しながら地上へと舞い降りる。

〈解題〉

愛は美をしたがえながらぼくたちの持つ善から発信される。愛と美の関係はルネサンス期に何度となく、諸著述家たちによって言及されている。カンパネッラの考えはそれらを踏襲している。つまり、美とは何かと問うと、愛への志向となる。人間の有限性を認めて、詩人は「不滅」、つまり神の世界を述べている。

マドリガーレ 10

英雄や哲学者たちは食と生殖で失敗すると、以前から明らかのように、息子たちは父親の偉業を受け継がずに思い出だけを留めているのであろう。

神の愛は（彼らよりもしなやかものを広げるのに役に立つ）、なべて全体を尊重する。

父親の種子は、母親がその善なるかどうかを万有に見出さないうちに消滅してしまった、父親の思慮や能力、効能ある神の似姿が、もろとも人間の種子のなかに、言葉や出来事、それに優れた至高の作品に、宿ったのである。

その美德に誓いを立てるために美的な詩を詠み、水甕みづがめから水が引いていくように生命が尽きてゆく。だが、神のみが前進を怠っても、枯渇と戦えるのだ。

〈解題〉

英雄や哲学者はその名声が永遠でありたいと願って、偉大なものを著述し、語り、作り出して、英雄的行為や不滅の恩恵に与ろうとする。それゆえ、彼らの面影は息子たちに、ではなく記憶のなかに留まってしまふ。面影と名前だけが永久に遺される。しかしこうした永遠性にも欠落があつて、彼らとて死ぬのだから、死後、書物も残さず、生身の肉体も失う。したがって、神だけが非存在の存在ゆえに、あらゆることに立ち向かえることが出来る。

マドリガーレ 11

あなた、愛よ、無限にして栄光に満ち、慈愛にあふれ、
天に夥しく、欠けているはくたちの中心に位置し、

感性の環に囲まれている、

それゆえに、ますます感覚し、いつそう愛を注ぎ享受する。

ぼくは、あなたとともにあらゆることに関わっている、

歌ったり、褒めたり、そして描いたりしている。

あなたにとって、宇宙は諸々の物体を抱えかつ内包していて、二つの力、熱と冷とが物質を支配している。だから、

あなたにとって宇宙とは、星辰と人間たちに彩られた、縁取りの鮮やかな秩序で成り立っている。

あなたにとって、太陽が回転し、地球が生命力を引き受けているので、多くの事柄が未成である。

あなたは、死にたいして、また多大な混乱を起こす悪にたいして、抗う。

あなた、寛容を創り、

残虐を砕く、

あなたから種々の共和国、王国、

それに、悪に対抗してすべての善をまとめ上げる完璧な愛である友情が生まれている。

あなたは、どこでも永遠にして、希望の兄弟であり、

恒久の歓喜に満ちあふれている。

あなたは、力と知に打ち勝つ。

〈解題〉

読んで通りの内容で、愛が至上であり、力（ポセンツァ）と知（サピエンツァ）に勝利する、と結んでいる。

29 善の徴しるしとなる美、つまり愛の対象 カンツォーネ

マドリガーレ 1

愛はなくてはならぬものであり、生まれながらの思慮分別と徳性に根づいている、そして万物をまとめ上げる三つのものとして、善意、真実、生命が在る、三つの存在を

任意に偶なまさに広く知らしめているものは樹木のように枝分かれしているか、おのずと枯れるか、もしくは愛するひとを飲なばせる善を示すか、のいずれかだ。かくて天上界のエロスが充ち満ちてあまた生まれてくる、また地上の

回廊で死ぬよりも馬上槍試合で打ち勝つ歓びをかみしめる法悦。やはり事物のあいだで、己や世界や神にとって善であるのはほかでもない、一方に健全があれば、他方に命に関わる損傷があるからだ、そして健康な肉体こそ至上の美德なのである。

〈解題〉

愛がなくてはならぬものだ、ということは万物が己自身を愛することであり、力や存在を知悉することから生じる。この愛は枝分かれして偶発的な愛に分割される。その愛に伴うのは他者を愛することである。というのも、それはわれわれ自身を愛することも意味するからである。他者を相手に己の見識を広めたいという欲求が存在するのは、人間が自身を愛しているからだ。われわれは死を迎えるし、みずからの子孫や名声にまで、生きる糧を探し求めているためだ。

そして神は人間が善であるときに限って、光を授けるのだ。その訳は、神は善を享受するのではなく、善を与える存在だからだ。必要不可欠な愛から、天上界に愛神が誕生し、それが充ち溢れると他者に善を賦与する。また地上では不死の恩恵を賜る。このため歓喜がわき起こる。

万有があらゆるひとたちにとっては善で、またあるひとびとには悪であるのは、神が、いかなるものが善なのかを周知せしめるために、善なる徴^{しるし}を見据えるからだ。悪を知るためには、その徴として醜悪なるものを設ければよい。

マドリガーレ 2

そういうわけで、美とは善の明らかな徴であり、もしくは文字通り善が棲まう存在であり、あるいは美と思われる

ものを生み出し得る善き公器でもある。また、一方で善について証明することが出来る。

ここに天上の王国の光があつて、飾らない生き生きとしたその美しさを見るにつけ、われわれはその有難味をしみじみと感受する。その光は多くのひとたちを照らして益をもたらししてくれる、裏を返せば影の醜悪さや暗黒の存在の美しさを指す。

蛇や龍は、その鳴き声や勇ましさ、それに描かれたかずかずの絵画からして人間を恐怖へと導く、動物たちは不格好に引き回されるが、相互に美的であり聖的でもある。

象や馬の慎ましさは、屈従と謙譲の徴で、双方納得のいくものなのだ、しかし人間の側からすれば、そうした象や馬はわれわれが操れる対象としてあつて、仕えてくれる善なる存在でもある。それに引き換え、僭主の悪徳とは目も当てられない打ち沈んだものである。

〈解題〉

美とは善のなかに潜む善の徴であり、他者のおかげだとも言える。美も善も光の美しさに似ている。あるいは不可思議な善の美は、加害者の行為が残忍性を帯びている際の徴なのだ。しかしこのような美は蛇どうしで美であっても、人間にとってはおのずと醜であるように、おのずと決定される。

飼いならされた馬は人間に隷属しているから悪さをしない。けれども馬どうしでは醜なる存在に違いない。人間にとっては、馬の性質の良さと言うことを聞くがゆえに善であり効用がある。また馬の有難味を知悉しているからでもある。

マドリガーレ 3

あらゆる事物事象に付随する美が仕える場と時はいずれか、そして醜に効用のない場、あるいはうまく功奏せずしていつそうつまらない場はどこか。しかし善や美の印にそつて美それじたいは醜ないし美を留めることになる。

白熱した海戦は死ぬか生きるかで美しいし、海難事故での犠牲者も美である。他者の金の使い方を学ぶのは勇ましさを見つめることと同意である。醜とは人間相手に悪を、病氣や貧乏を、それに辛酸を願うか思い出させるか、のいづれかだ。

白は、黒と比べてつねに美である、胡麻塩頭はより見苦しく、早晩白髪になるだろう。だが、もし思慮分別が奏を功すれば美しく見えもしよう。

ソクラテスの美はその四肢にあり、これまでにない徳性で知られている。一方、他の哲学者のあいだではそれはおぞましい。目が黄変して病の兆候にあつて醜悪である。黄金の美しさは高級感をかもしだし、劣悪からはほど遠い。

〈解題〉

自己のため、そして他者のため、森羅万象に美の有り様を示すこと、つまりあたかも万有そのものが醜であるか美であるかを示唆するが如しである。その第二義的な意味として善と悪の徴である。それゆえ、海上戦や海難事故を目の当たりにすることはほかでもない、われわれ人間の存在じたいが悪であることの証左であり、悪を所有しないことが善である。しかしそれは苦を甘受する者の徳性を顕現している。

人間の悪を記憶することは、長患いのひとや貧しいひとを目にするように、みつももないことなのだ。白など、そ

れじたい美であるが、髪に老いや死の兆候が垣間見られる折りは醜なのだ。しかし、高齢者が思慮分別を吐露すれば醜ではなくなる。

マドリガーレ 4

美しさがもし善で近寄りがたく生来のもものでも、知と愛と力が第一で、つねにこころ寛^{ゆた}かだ、さらに有用で誠実だ、その子息たちは徳に恵まれているが、他の者は外見だけだ。

より知的で強靱で純粹な愛を示すひとは光り輝く美なのだ。それゆえ偉人たちは安らかな死を迎える。英雄たちの寛大な心根は美なのであって、決して害毒ではない。

学識や法律や詩作は賢者たちの仕事だ。だからぼくは嫉妬など抱かずに自分以外のひとの榮譽を寿ぐことが出来た。それらのひとたちはこれから将来に向け生きていく上でたいへん思慮深いのであり、ぼくたち同士に広い意味での至上なる美をもたらすのだ。

美は船であり武器を手にした騎士に例えられよう。しかし運命に逆らい現実を重んじたアルキメデスの乗った船は転覆し、上空を見上げることとなり、そこにはマルテがうかがえた。

(解題)

ここでもカンパネッラは「プリマリタ」に言及しており、「力」が「知」を生み、その両者は「愛」から生じるとしている。最高の善は「力」、「知」、「愛」であって、美がこれら三原理の多寡如何によると述べている。「マルテ」とはギリシア神話での焔軍神、戦いの神を指す。これまでもそうだが以後も、「シエンツァ *scienza*」を「知」、「サピ

エンツァ *sapienza*」を「智」と訳す。

マドリガーレ 5

人工的な美しさは物質的のものにあるのではなく神的な模倣にあり、自然の娘である芸術のなかだ、自然の親が神であるように自然からの着想は親の下で行われる。

芸術の見事さを発揮出来る人物は模倣の技術がいつそう上手い人物だ。テルミヌスのようなやはりさまになっていない彫刻家が金を彫るよりも、優れた彫刻家によって彫られた大理石の彫像のほうが美しい。芸術作品は仕舞っておくよりも外に出しているほうが美しい。

兄弟喧嘩ではアトレウスより道化師テルシウスのほうが強い。彼は優れた模倣の情景に置かれアガメムノンより美しい。この御仁は模倣されたことがなかった。

ダンテ『神曲』の地獄篇は天国篇より美的センスにあふれている。そう宣言するわけは声や感情が詩人ダンテの用いる隠喩や寓話よりも綺麗だと思われるからだ。アリオスト作『狂えるオルランド』中の老人ガブリーナの衣服は美しい。

時代遅れの教皇のように、二重の醜さがあるのは政治と選挙だ。

〈解題〉

このマドリガーレの内容は一目瞭然で、「美」について謳っている。テルミヌスは、ローマの境界の標の神。テルシテスは『イリアス』に登場する醜悪で喧嘩好きな男でアトレウスとは兄弟。二人の仲は醜悪だった。アガメムノン

はトロイ戦争のギリシア軍の総大将。

マドリガール 6

今や、美が善の見せかけならば、それは感覚だけのものとなる。視覚と聴覚のように長いあいだに見わけがつかなくなるだろう。一方、味覚や触覚の能力、あらゆる内的な感覚については、触覚が乱れていない限り美は善なのだ。そして力が外界のものを吸い込むように、学知はその夫たる思慮と交わる。こうして妖精である美は想いがれて、愛は実に限られた範囲で昼も夜も動きまわる。とつても愉快に過ごしてのちそこで美は姿を消す。

善は愛を自分のものとして受け容れ、美は愛を褒め称える。美とは旋律なのだ。けれども安定しないスピリトのなかで耳をそばたてると、甘美に聴こえる。

この音調が大きくなると生き生きとなつて歓喜が心の底からやつて来る。だが雑音が混じると気分が悪くなつて、その音を打ちのめし媚びへつらいが始まる。

〈解題〉

カンパネッラ独特の、「善」、「美」にたいする見解の披露である。それに「五感」が付随して彼の肉感的世界観が語られていて興味深い。「善」と「美」と「四感（ここでは嗅覚には言及されていない）」、それに「愛」が絡まっている。

マドリガール 7

自分自身、子供、名声といったものはある種の器のなかで保存される、

徴は美しいと言われている、一方で形はその固有の美ゆえに誇りと愛を得る。というのも、技術や能力で一致到達鍛錬するのに使用する大きな板のように、徳性は裡なるものを見出すからだ。

しかし着づらい厚手の上着のように情報を察知するのに役立たないならば、それほど能力のないあるいは愚かな頭で醜惡な顔つきとなる、他方、能力や知識もないひとは自室も持たず、整理整頓も出来ない。それゆえ人生についての希望も少ない。

だが、イソップ物語のなかでの隠れた勤勉と人生のように、希望こそ外見は醜いが内部は美しいものだ。仮に外部の円周が美しいならば円の内部の中心も美しいものだ。もしその逆の場合はいつそう悪い。そして双方ともども完璧に逆に提示されたときには最悪となる。

〈解題〉

このマドリガールでも、善Ⅱ美が繰り返されている。ともに、プラトン哲学の教えによるところが多い。

マドリガール 8

肉体の美が要求するのは高い身長と左右対称な四肢とが備わったもので、仕草や動作がしなやかにしてまとまりがあり、ガリアルダを踊り肌の色艶もよい。神は身振り手振りについては女性よりも男性のほうをよしとする。という

のも男性のほうが女性より美的で神的だからだ。

けれども愛らしさの点では、女性が男性を上回っており、純粹に愛する対象となる。それゆえ女性は小柄で痩せており、疲労感が滲み出ていて顔面蒼白で美を欠いている部分がある。

さらに老けて動作にぎこちなさが見られ、粗野で虚弱でひねくれており、やる気がなく悪質で抜け目ない。

仮にこの世界で醜くいのならあらゆる種類の徳性は畏怖されるだろう。すべての美が善なるもの、花であつたら、美は愛苦しい華なのだ。あれやこれやで他のひとと味の好みが一緒だということはありえない。

〈解題〉

ここでも美と善、それに男女の差異について謳われてる。カンパネッラは男性の均衡のとれた肉体のほうに軍配を上げている。「ガリアルダ」とは、十六、十七世紀に流行した三拍子のダンスのこと。

マドリガール 9

うるわしき青春、みずみずしくて意味あり気で、将来を約束されている、生きる糧が詰まった胚、ほくらにとつての欲びが大きな力となっている。

青春がかくも甘美だと知らずにいるのなら、人生の苦難や歓喜のように、青春は突如として醜さを露呈させるだろう、さらに詐欺師めいていて残忍で見かけが奇態であるのなら、腐敗が伝播し有益を越えて害毒となり、見かけは聖的だが内面は醜悪に思われる。

富と榮譽は、言わば美德をこの目で見て来た上での善なのだが、本来はそれより悪魔的だ、そして身心ともども穩や

かでない、というのも常識が崩れ落ちたことが大いなる証^{あかし}だからだ。

美は虚偽となり、普通以上のことを成さなくては善は見出し得ない。いま現在、ぼくらのなかではある種の悪い筋書きに対抗して、また何らかの利用可能なときに美であり、神やこの世界に向かつては、それぞれが無限に活用尊敬され、その美しさの度合いを知られており、創作者もこの歓びを知悉している。

〈解題〉

ここでは「青春」が謳われている。案外、青春をテーマにしないカンパネッラだが、ここでは、「善」と「美」に結び付けていて、興味深い。

マドリガーレ 10

戦争、無知蒙昧、僭主、それに詐欺、死、殺人、中絶、そして苦境は、人間と狩猟との関係にも似て、この世にあっては美であり、剣闘士ごつこと陽気な狂人なのだ。

火を熾^わし食事をするために木を燃やす、卵と鶏でなぜからだが回復するのか。葡萄酒を蓄え、卵黄をこなごなにする。ハエの引つかかっているクモの巣、悲劇を装っても、仮に人生がやはりうれしいのなら、あらゆる病気による死を乗り越えて行くし、この世に生まれたほうが愉快だろう。

だがもつと美しいのは悪行や醜悪と思われるものだ。そうでなければ、混沌とした世にあつてすべてが不動でなく渦巻いている。ついにこれらはあまねく喜劇となり、神について思量するひとはこころをひとつにして神と相対す、ありとあらゆる醜怪、悪事、美しい仮面が微笑んでとても愉快そうだ。

〈解題〉

エビクロス（前三四二頃―前二七〇年）の哲学（快樂主義）への驚くべきアンチテーゼが詠まれている。その哲学によると、森羅万象は美であり善でもあるが、ほんの一部に醜惡な面が見られる、という。カンパネッラはもっぱら、その醜い部分をここでは拡張して詠んでいる。

マドリガーレ 11

歌、それが思いのままに唄われるのなら、万有はその存在じたい榮譽である、国家の法律でなくて自然による美しさ、それに歌謡はあらゆるものを支えている、すべての善である透明な輝きの淵源は異教の神々で、その神々は美とともに善を、善とともに恋心を抱いている。怠惰な嗟嘆者と愚かな嘆息者はその異端の神々を蔑視して、偉大なる神の再登場となる。聖なる神殿であって生ける像である神はあらゆる存在のなかに映し出され、死せる者からは神像が造られる。被造物を創造する上で神がどれほどの神慮と力を必要としたか。

〈解題〉

自発的な「歌」を一等良いとしている。カンパネッラが詩人であるからには当然の発露だろう。「創造」の際、神にあつてもどれほどまでの神慮と力量が入用だったかに言及している点が興味深い。